ワンダフルワールド

こどものワクワク、
いっしょにたのしもう
みる・はなす そして発見！
の美術展

Wonderful World

Sparkle is everywhere! Let's see, talk, discover,
and share the fun with everyone!

MOT
MUSEUM OF CONTEMPORARY ART TOKYO
東京都現代美術館

ごあいさつ

東京都現代美術館は赤ちゃんから大人まで一緒に楽しめる展覧会「ワンダフル ワールド　こどものワクワク、いっしょにたのしもう　みる･はなす、そして発見！の美術展」を開催します。展覧会では、こどもたちの身近にあって、興味の対象であるモチーフ―フルーツ、電車、鏡、動物、ブロックなど―をアート作品にした５人のアーティストによる空間全体を作り出すような体感型・参加型作品を展示します。

赤ちゃんや小さなこどもを持つ親にとって、こどもと一緒に美術館に行くのが難しいと感じたり、そもそもこどもに美術がわかるのだろうかという疑問を感じたりするかもしません。この展覧会では、小さなこどもの視覚世界を表現した作品や、作品に触れて遊び体験的に美術を鑑賞する作品が展示されます。こどもの興味や理解に寄り添った作品を展示することで、小さなこどもが楽しめる展覧会を目指します。

美術館という非日常の世界で出会う作品たちを見て思ったことを語らうことで、いつもは気がつかない感覚や気持ちに出会って欲しいと思います。それは自分自身の新たな姿を見つけることであり、そして隣にいるこどもたちと経験を共有することでお互いの世界を発見することにつながっていくことでしょう。視点を変えることで見えてくる世界、それはすばらしい世界“ワンダフル ワールド”なのかもしれません。

関連プログラムでは赤ちゃんや小さなこどもとその家族を対象とした鑑賞プログラムやワークショップなどを開催します。これらを通して乳幼児とその家族にとって美術館や美術鑑賞が果たす役割を考える機会にしたいと思います。

最後になりましたが、この展覧会の開催にあたり、ご支援ご協力賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。そして何よりも本展覧会を実現するために、多大なるご尽力をいただきました５人の出品作家に心から感謝を捧げます。

東京都現代美術館

Foreword

‘Wonderful World’ is an exhibition that can be enjoyed by everyone, from infants to adults. Five contemporary artists have taken motifs that are both familiar and interesting to children—fruit, trains, mirrors, animals, building blocks, etc. and turned them into art, converting exhibition space into sensory, interactive works.

Parents with babies or small children often find it difficult to visit museums and probably wonder whether their children will be able to understand art. However, this exhibition will present works that express the visual world of children or art that can be appreciated through the experience of touching and playing with the works. By presenting works that conform to the interests and comprehension of children, we aim to make it an exhibition that even small children will be able to enjoy.

We hope that by verbalizing what they feel when they come into contact with these works within the extraordinary setting of an art museum, the children will notice sensations or feelings they generally remain unaware of. This will allow them to discover a new person within themselves and by sharing their experiences with the other children around them, they will be able to encounter each other’s worlds. By changing their viewpoint, they will find that they are able to discern a fantastic new world, one that may turn out to be a ‘Wonderful World’

During the exhibition period, we will be holding programs for small children and their parents, such as appreciation programs and workshops. Through these programs, we hope to create a valuable opportunity to consider the role of the museum and more over the role of art appreciation for toddlers and their families.

In closing, we would like to thank everybody who for their support and cooperation. Above all, we would like to offer our heartfelt gratitude to the five artists without whom it would not have been possible.

Museum of Contemporary Art Tokyo

謝辞

この展覧会を開催するにあたり多大なご協力を賜りました出品作家の方々に厚く御礼申し上げます。
また、下記の関係する方々、ここにお名前を記すことはできませんでしたが、本展覧会実現のために
格別のご尽力を賜りました方々に深く感謝の意を表します。（敬称略、順不同）

金澤麻由子
クワクボリョウタ
橋本トモコ
船井美佐
武藤亜希子

SHISEIDO

agnès b.
クレサンジャパン株式会社
株式会社クサカベ
株式会社サクラクレパス
ターナー色彩株式会社
ホルベイン工業株式会社
株式会社リコー
千葉県立松戸高等学校
深川資料館通り商店街協同組合
深川ふれあいセンター
グランチェスター・ハウス
ウエストユニティス株式会社
koikoi furniture factory
武蔵野美術大学芸術文化学科
中央大学研究開発機構
京都嵯峨芸術大学メディアアート分野
江東区立元加賀小学校

杉浦幸子
三澤一実
米徳信一
山口真美
金沢創
稲田祐奈

冨田めぐみ

二宮可子

鈴木明美
上村直未

村井良子

ギャビン・フルー

藤原工

井村誠孝
金谷一朗
井手口裕太
武村浩志
桑谷達之

山口レイコ
堀口淳史

株式会社アルク
有限会社アートアシスト
有限会社スズキ
縣健司
伊東圭一
伊東のぞみ
伊東蒼紫
上野愛良
河越雪華
田中慎一
田村一
中島智恵子
中島春宵
長瀬由衣
仲田仁美
羽田美恵子
林夏輝
船井もと子
星野美代子
松田太郎
松田時青

しまぶっく
登坂希生
安藤晶子
市川弘子
今井かね子
宇野時子
方波見征子
岸田妙子
篠田弥栄子
髙橋幸子
森本伶子
山田彰代

宮山広明
稲井佑羽
牛久晴香
江田由依
大澤奈央
大橋楽実
岡本彩華
小熊しおり
樫田真実
鎌田里緒奈
河瀬菜津実
木村萌恵
栗本明優
小坂奈央
櫻井萌香
嶋岡璃緒
鈴木由那
髙橋康平
玉谷こゆき
知念ゆいか
中あやの
池岡真穂
池田彩
太田琴乃
荻島安澄
奥稔里
髙橋知里
館花眞子
新堀柊人
原如水
宮良南波

千葉美アートカルチャースクール子ども絵画教室
ちばびっ子
袋部

小原大蔵
小原圭蔵
瀬尾嵩弘
田代龍寿
服部早百合
服部梨咲子
原素子
原直実
早川湖春
森愛子
森波琉果
渡部莉奈
渡部紗帆

阿部美里

目次　Contents

ワンダフル ワールド
こどものワクワク、いっしょにたのしもう　みる・はなす、そして発見！の美術展 4
山本雅美

Wonderful World
Sparkle is everywhere! Let's see, talk, discover, and share the fun with everyone! 7
Masami YAMAMOTO

図版　Plates

橋本トモコ　Tomoko HASHIMOTO 10
クワクボリョウタ　Ryota KUWAKUBO 13
船井美佐　Misa FUNAI 16
金澤麻由子　Mayuko KANAZAWA 19
武藤亜希子　Akiko MUTO 22

作家略歴　Biography 25
出品リスト　List of Exhibitions 30

ワンダフル ワールド
こどものワクワク、いっしょにたのしもう　みる・はなす、そして発見！の美術展

山本雅美

１．はじめに－乳幼児と美術館

ここ近年、夏休みの美術館のエントランスにベビーカーが溢れるほど並ぶ風景も珍しくなくなってきた。小さなこどもたちを連れた人々の目当ては「こども向け」の現代美術展である。

東京都現代美術館では､「赤ちゃんから大人まで一緒に楽しめる展覧会」として､「こどものにわ」展（2010 年)､「オバケとパンツとお星さま」展（2013 年）を開催している。このような展覧会の開催の背景には、20 代～ 40 代の現代美術に慣れ親しんだ人々がこどもを持ったときに美術館を親子で楽しみたいという思いがあるのだろう。もちろんアーティストや学芸員にしても、自身のこどもと一緒に美術館に遊びに行きたいと思い、親子で楽しめる美術展というものに関心を示す人々が増えているのも事実である。このような状況に美術館や博物館に子育て支援という視点からの役割を求める指摘もある（注 1)。

「ワンダフル ワールド」展の準備に入ったときに、何人かの子育て中のアーティストや美術関係者と議論した。「美術館で騒いだり、作品にさわったりしてまわりに迷惑をかけてしまうかもしれないと思うと、こどもを連れていくのは難しい」、そしてもし行けたとして「そもそもこどもは美術を分かるのか？展覧会に連れて行く意味があるのだろうか」、という疑問が出てきた。このように関心はあるものの小さなこどもを連れて美術館にいくのにはまだまだハードルを感じるのもまた一方である事実だ。

「乳幼児と美術館」というテーマでこれまでの美術館の取り組みを概観してみる。企画展の開催にあわせて 1990 年代から託児サービスが実施されている。これは美術館の一部のスペースを託児スペースにし、専門のシッターがこどもを預かり、その間親が大人の時間を楽しむというものである（注 2)。当館でも 1997 年の「ポンピドゥー・コレクション」展において託児サービスが導入された。

また 2001 年の横浜トリエンナーレでは「バギーツアー」という、ベビーカーといっしょに、つまり小さなこどもたちを連れて展覧会をまわるというプログラムが実施されている。ベビーカーに小さなこどもを乗せて展覧会を見るということに不安を抱えている親をスタッフがサポートする形で、主に大人が展覧会を楽しむという趣旨で行われたものである（注 3)。

2012 年から茅ヶ崎市美術館ではじまっている乳幼児の鑑賞プログラム、「0 歳からの家族鑑賞会」はそれまでのプログラムと違い、赤ちゃんが作品を見ることをテーマに、つまり「乳幼児の美術鑑賞」をテーマにプログラムが行われている（注 4)。これは当館で行った「こどものにわ」展（2010 年）と同じ問題意識であり、乳幼児が美術鑑賞をするという視点からプログラムが構成されている。

このような各地の実践を取りまとめるように、今年から美術館教育や心理学を専門とする大学関係者や研究者を中心に乳幼児の鑑賞教育について研究が始まっており、「乳幼児と美術館」というテーマは今後ますます探求されていくことになるだろう（注 5)。

２．ワンダフル ワールド－みる・はなす、そして発見！の美術展

「乳幼児の美術鑑賞」をテーマに展覧会を企画する。これが「こども向け現代美術展」として「ワンダフル ワールド」展を考え始めたときの課題であった。「乳幼児は美術鑑賞をすることができるのだろうか？」「もしするとしたらどのような方法によるのだろうか？」。この答えは鑑賞者の姿を想像することで見えてくる。

乳幼児というのは 0 歳～ 6 歳までのこどものことを指す（注 6)。彼らは基本的には一人では美術館に来ない。親や祖父母などの保護者と一緒に美術館に来る。もしくは幼稚園や保育園の行事として保育者と一緒に美術館に来る。親しい大人が美術館とこどもの世界を繋いでいくのである。そして、彼らは文字を読まない。キャプションや解説文からの情報によって知識を補い、自ら鑑賞を深めていくという行動は考えにくい。目の前に広がる世界、作品に直接触れることから鑑賞がはじまっていく。

この 2 点から求められる展覧会像は、何らかの知識やメッセージを作品から読み取るという展覧会ではなく、体験型･体感型の作品を中心に、一緒にいる人たちと作品を介したコミュニケーションが促され、その交流の体験そのものが鑑賞であると考える展覧会だ。

その方針から、展覧会では 5 名のアーティストと共に、はじめての美術館との出会いを演出する展覧会として、どんな体験をして欲しいのかという議論を深めながら展覧会をつくっていった。5 人のアーティストたちを特徴づけるのは「こどもの身近にあって興味の対象であるモチーフをアートにしている」という点である。はじめて美術に出会うとき、その体験は素晴らしいものであって欲しい。そんな想いを共有した 5 人のアーティストは東京都現代美術館の空間にあわせていずれも新作を制作した。

橋本トモコ：おはなしの国

橋本はリンゴや椿などのモチーフを特大のキャンバスに描いた絵画作品や、モチーフの形にカットアウトされたパネルに描いた絵画作品を、白い展示空間にインスタレーションすることで、「美しいパネル、美しい絵具、美しい絵画表面と共に美しい空間の創造」を目指している。本展では初期の代表作である≪ひらめきは舞い降りる≫（2003 年）から、新作≪白い光、落ちる闇－椿≫（2014 年）まで、13 点を出品。リンゴや朝顔、椿など身近なモチーフを単純な形と明快な色彩－しかし実際にはその形と色彩は単純なものではなく、自然の形を忠実にかたどったものであり、透明な油絵の具を丹念に塗り重ねる古典技法によって描かれた色彩である－によって、見たことがあるものが見慣れない大きさで展示空間に広がっていく。

展示されたリンゴの絵画（≪ヒラメキ≫ 2003 年）は人の大きさほどあり、こどもたちが背比べをするように絵画の前に立っていた。また天井から降り注ぐ光とともに葉が落ちてくる≪白い光、落ちる闇－椿≫（2014 年）のインスタレーションは圧巻で、多くの赤ちゃんたちが天井を見上げ、その視線を追って大人たちが空間の壮大さに気がつくという体験をしていた。

美術館という非日常の世界を堪能するこの展示室には「おはなしの国」というタイトルをつけた。このタイトルには親子で絵本を読むように展示室のなかで会話して欲しいという思いを込めている。「みて、はなす」という行動によって、親子のコミュニケーションが促される。同じものを見ていても、感じること、見えているものは実は違うという体験が美術を通してできるのだ。

クワクボリョウタ：光と影の街

「『見る』行為だって、最初はそれ自体でよほど面白いことだったに違いない。」（注 7）と語るクワクボは、本展で赤ちゃんの視覚世界を探求した新作≪ハローワールド！≫（2014 年）を出品した。この作品は 5 つの赤ちゃんが反応する動きを再現したオブジェに光を当てて、オブジェの動きとその影の動きの対比で、赤ちゃんがどのように反応するか、それを見ている大人たちにどのような気づきを与えられるかを検討したものである（注 8)。作品名である「Hello world」はプログラミング用語であるが、クワクボはプログラムを学び始めたばかりの人が「Hello world」という言葉をコンピューターに表示するプログラムができた時の驚きや喜びというのが、赤ちゃんがはじめて世界を見たときの驚きや喜びと似たようなものではないかと語っている。この作品は、作品そのものの動きを見ることと共に、小さなこどもと一緒に作品をみて、こどもの反応を通してまた作品を見直す。大人がこどもの視覚世界に導かれる作品である。

LED 電球をつけた鉄道模型が日用品を並べてつくったオブジェを照らして壮大なイメージを創りだす≪ 10 番目の感傷（点･線･面）≫（2010 年）は小さなこどもの視覚世界を探求したインスタレーションである。クワクボは「見る人の記憶を借りて見てもらう作品」とこの作品について語ったが（注 9)、「見ること」を探求してきたクワクボにとって、こどもの視線を借りることで、再度「見る」行為を自覚的に行うことが出来たのであろう。そして、小さなこどもに「見ること」はできないのではないか？という疑問は杞憂であり、この展示室では大人もこどもも「見る」ことに集中していたことを実感できたのである。

船井美佐：楽園／境界

現実と空想の世界の境界をテーマに絵画空間を作ってきた船井は、本展で床も壁も真っ白な展示室全体をキャンバスに見立て絵画空間をつくった。二次元と三次元、イメージともの、自然と人工、内と外、それらの境界を浮遊する体験そのものが作品であるとし、洞窟や楽園をモチーフにした鏡の作品（≪洞窟／爆発≫ 2014 年、≪ Hole ／境界／桃源郷／絵画／眼底≫ 2010 年）や森羅万象を描いたすべり台型の体験作品（≪ Mountain ／ Motoko ≫ 2014 年）を出品。船井によると、これらの作品の「描かれているところと描かれていない所が反転してひとつとなり、見る者と見られる作品と展示される空間の間の関係性が反転します。それによって、人の記憶や感覚の底にあるイメージの世界と、現実の物質の世界の間を鑑賞者は同時に体験」することで、境界のあちらとこちらを行き来する感覚を体験する（注 10)。

作品のテーマである楽園とは、誰でも知っていて共通のイメージが出来る景色なのに、実際には何処にもなく、誰も行ったことのない場所である。船井はそのような風景に、「人間が根底に持っている原風景、生物としての究極の内なるイメージなのではないか」「それは人が生きていく上で絶望や不安から立ち上がるために必要な希望の景色ではないか」と思いを込めている（注 11)。

本展では、こどもたちが体験型作品で遊び、鏡をのぞき込んでいる姿を楽園風景に取り込むことで「こどもたちが遊ぶ楽園風景」をつくりだしている。この風景を見ることで大人も自身がこどもだった時を思い出すだろう。絵画空間と現実の間について考察を続ける船井の現時点での到達点である。

金澤麻由子：動物たちの森

動物たちが住むアニメーションの景色のなかに鑑賞者の姿が映し出され、まるで一緒にいるような体験ができる映像インスタレーション≪うつろい いろは≫（2014 年）を出品。

展示室を取り囲むように張り巡らされたキャンバスには､京都･大覚寺の大沢池をモチーフとした手書きの風景が描かれている。そのキャンバスの上に「はなさかじいさん」、「動物の神様」、「森の動物たち」、「雪だるま」などの出来事をテーマに四季を表現した映像が映される。そして、スクリーンの前に立つと鑑賞者の姿がキネクトカメラや iPhone を通して鏡のようにスクリーンに映され、その手の動きや体の形に反応して、鑑賞者の姿と映像がインタラクティブに反応する。「体験する絵画」である。

金澤の作品は「絵画を鑑賞すること」について考えさせてくれるものである。絵画を鑑賞するとき､私たちは目前の絵画と自分が元々持っている経験を重ね合わせてひとつのイメージを理解している。この「体験する絵画」はそんな鑑賞者の頭の中の体験を目に見える形にしてくれるものである。見る者を絵画世界に招きいれることで、鑑賞者はひとときと咲き誇る花々や森に住む動物たちと戯れる。その経験は絵本を読んだときに空想した姿かも知れない。絵画を鑑賞する第一歩として絵画のなかに飛び込んでしまう。その経験は展覧会を楽しんだ親子にとって絵画鑑賞のレッスンのひとつになったかもしれない。

武藤亜希子：水の路

武藤の作品は「記憶の中に広がる風景」をテーマに、作家自身が出会った人々との対話や土地でのリサーチから作品の物語がはじまる。本展では、美術館がある木場・深川地域の特徴である「水路」をテーマに、水の流れをイメージした布製ブロックのインスタレーション≪水の路 w+a+t+e+r+w+a+y≫（2014 年）を出品。これは､水路をイメージした水色を基調とした波や水をイメージした大型のオブジェに、1500 個をこえる布製ブロックをスナップでつけたり、外したりすることで作品の形をどんどん変えていくという参加型作品である。

布製ブロックや波形の紙のオブジェは、深川史料館通り商店街の協力を得て美術館近隣の地域の人々から提供をうけた布－水や川、水路をイメージさせる青や水色の布、藍染めの布や祭りの袢纏、手ぬぐいなどが提供された－を使い、地域の人々や近隣の小学校などでのワークショップにより制作された。

作品名にある「＋」という記号は武藤によると、水をイメージした布製ブロックをスナップでつなげていくことで水路の形にしていくという意味で使用しており（注 12)、本作品は鑑賞者が布製ブロックをつなげていくことで完成する。

この作品は水路の発展と共に地域が栄えていった土地の記憶と人々の記憶をつなげるものとして機能することを目指していた。実際に制作の段階から地域の人々をつなぎ、世代を超えたコミュニケーションを促し、さらに美術館に来る人々をもつなごうとしていた。

この作品は美術館に来たこどもたちにとっては格好の遊び場だったかもしれない。しかし手にした布の手触りや目にした色彩はこの地域を特徴づけるものであり、その経験はいつか何かのきっかけでこの美術館とこの地域につながることになるかもしれない。

３．おわりに－新しい美術館像にむけて

「乳幼児と美術鑑賞」を考えるとき、最初に「小さなこどもに美術が分かるのだろうか？」という疑問があった。その疑問は展覧会で見られたこどもとその親の姿が解決してくれた（注 13）。

展覧会を通して見られた、「みて、はなす」という行動は親子の日常生活のなかではよくある行為である。しかしいつもの行為も美術館という非日常の作品世界のなかでは一風変わった経験になっただろう。同じものを見て違う感覚や見え方をしていることに気がつかせてくれる美術鑑賞というのは、こども自身にも自分の世界があること、彼らには自分の世界をつかむ力があることを伝えてくれるのである。

そして、「ワンダフル ワールド」展に出品したアーティストたちが見せてくれた幼児の視覚世界の美しさ、その世界の豊穣さは、大人である私たちに「はじめて世界にであったときの感動」を思い出させてくれるだろう。いや、もしかしたら、その感動は遠い過去に忘れ去られ思い出せないものかもしれない。しかし、目の前のこどもたちが感じている新鮮な驚きが、はじめて世界を見たときの感動というものを追体験させてくれるかもしれない。

親子のコミュニケーションの印象的な一場面に美術や美術館が果たす役割があるのではないか。多くの人が小さな頃家族で行った動物園や遊園地での楽しい思い出をもつように、展覧会を通して美術館で親子の楽しい思い出をつくってもらいたい。そして、十年後、二十年後、「ワンダフル ワールド」展で夢中で遊んだこどもたちが成長して大人になったとき美術館に戻ってきてほしい。さらに自身のこどもが生まれたとき、こどもと遊びに行く場所のひとつに美術館がある。そんな新しい美術館像をつくる試みははじまったばかりである。

［やまもとまさみ　東京都現代美術館 学芸員］

注釈

注 1　難波祐子「こどものにわ」（『こどものにわ』展カタログ）2010 年　東京都現代美術館 p.11
「人々が集うアートの庭で、さまざまな人と関わりながら、単に鑑賞するだけではなく、互いに交流をするきっかけになれば、子育て支援の観点からも美術館という場のもつ可能性が広がるだろう」

小野和「幼少児活動への顧慮」（小笠原喜康、並木美砂子、矢島國雄編『博物館教育論－新しい博物館教育を描き出す』）　2012 年　ぎょうせい　p.94
「博物館にて「異世代が交流し、体験を共有し、楽しみつつ学ぶ」ことは、少子化、核家族化がすすむ現在のわが国の状況の中で、受動的な遊園地等の遊戯施設や子どもだけを対象とした託児施設等とは異なる、博物館のもつ子育て支援機能の特徴として重視する必要がある。」

注 2　近年では国立新美術館、東京国立博物館、東京都美術館をはじめ、全国各地の美術館で託児サービスが実施されている。

注 3　「ワンダフル ワールド」展関連プログラム　連続講演会　杉浦幸子氏（武蔵野美術大学芸術文化学科准教授）による「赤ちゃんと美術館を楽しもう」（2014 年 8 月 23 日実施）。

注 4　茅ヶ崎市美術館の「0 歳からの家族鑑賞会」はアートケアひろば会長の冨田めぐみ氏によるもので、同氏は平塚市美術館での「赤ちゃんアート」の講座も担当している。

注 5　本展では、杉浦幸子「乳幼児の心理的発達に関わる美 - 館における鑑賞プログラムの分析と開発」文部科学省科学研究費 2014 年度挑戦的萌芽研究に参画し、鑑賞プログラムを実施した（「赤ちゃんからの家族鑑賞プログラム『ワンダフル ワールドをたんけんしよう！』」2014 年 7 月 23 日、8 月 8 日実施）。

注 6　母子保健法では乳幼児を次のように定義しており、本稿でもそれに準じて用語を用いる。乳児：1 歳未満のこども、幼児：1 歳から小学校就学前までのこども。

注 7　『光あれ！: 光と闇の表現者たち 』2012 年　栃木県立美術館　p.20

注 8　本作品の制作には中央大学文学部心理学研究室教授の山口真美氏および日本女子大学人間社会学部心理学科教授の金沢創氏の学術的な知見よる協力を得た。

注 9　「ワンダフル ワールド」展関連プログラム　アーティストトークのクワクボ氏のトークより（2014 年 8 月 3 日実施）。

注 10　船井美佐「船井美佐　作品解説」（『ワンダフルワールド』展会場パンフレット）2014 年

注 11　注 10 と同じ

注 12　「ワンダフル ワールド」展関連プログラム　アーティストトークの武藤氏のトークより（2014 年 7 月 27 日実施）。

注 13　「ワンダフル ワールド」展では 0 歳～ 2 歳児とその家族を対象とした鑑賞プログラムを実施した。
「赤ちゃんからの家族鑑賞プログラム『ワンダフル ワールドをたんけんしよう！』」　講師：杉浦幸子（2014 年 7 月 23 日、8 月 8 日実施）
「赤ちゃんからの家族鑑賞プログラム『みて・はなす、ワンダフル ワールド鑑賞ツアー』」　講師：冨田めぐみ（2014 年 8 月 20 日実施）

Wonderful World
Sparkle is everywhere!
Let's see, talk, discover, and share the fun with everyone!

Masami YAMAMOTO

1. Introduction — Infants and Art Museums

In recent years, it is no longer unusual to see the entrance to the museum overflowing with baby strollers during the summer holidays. The people who bring their small children here do so in order to visit contemporary art exhibitions created ‘for children’.

Previous ‘exhibitions for infants and adults to enjoy together’ that have been held by the Museum of Contemporary Art Tokyo, include, ‘Garden for Children’ (2010) and ‘Ghosts, Underpants and Stars’ (2013). The object of holding this kind of exhibition is to allow people, ranging in age from their 20s to 40s, who have a history of appreciation of contemporary art, the opportunity to be able to bring their children with them and enjoy exhibitions together. Of course, this group includes artists and curators who would also like to bring their children to the museum and it is a fact that there is a growing interest in art exhibitions designed to be enjoyed equally by parents and children. It has also been pointed out that in this respect, art galleries and museums have an important role to play in support of child rearing.[1]

When we initially began our preparations for the ‘Wonderful World’ exhibition, we gathered together several artists and other people connected with the art world who are presently involved in child raising for a discussion. Among the comments that arose from this were, ‘I worry that my children will misbehave in the museum, touching the works and annoying the other visitors, so I find it difficult to bring them with me,’ or even more to the point, ‘Are children even able to appreciate art? Does bringing them to see exhibitions have any meaning?’ From this, we realized that although parents may be positive about bringing their children to art museums, they still feel that there are hurdles to be crossed before they could do so.

What steps have museums taken to date regarding the problem of ‘infants and museums’? Firstly, childcare services have been made available during certain special exhibitions since the 1990s. Museums have set aside areas where children can be left in the care of a specialist carer, allowing the parents freedom to enjoy the exhibition.[2] In 1997 MOT introduced a childcare service of this type for the ‘La Collection du Centre Georges Pompidou’ exhibition.

The Yokohama Triennial of 2001 introduced a ‘Buggy Tour’, in which people were invited to take their young children around the exhibition in their strollers, with staff on hand to offer their support to people who were worried about taking a small child around the exhibition in this way. Events of this type are organized in order to allow the adults to enjoy the exhibition.[3]

The Chigasaki City Museum of Art initiated a program in 2012 entitled ‘From Age 0 Family Appreciation Program’. This differed from previous events in that it was designed with the aim of getting infants to look at the works, that is to say, it was a program established on the theme of ‘Infant Art Appreciation’.[4] MOT’s ‘Garden for Children’ (2010) exhibition was held with a similar awareness of the issues, the program being designed with a view to allowing infants to enjoy art.

In this way, various experiments have been undertaken throughout the country and starting this year, the researchers in the field of museum education and psychology have both started research into art appreciation by infants. The theme of ‘infants and art museums’ being one that will receive increased attention in the future.[5]

2. ‘Wonderful World — Let's see, talk, discover, and share the fun with everyone!’ Art Exhibition

When we started preparing for the ‘Wonderful World’ exhibition our objective was to plan an exhibition on the theme of ‘infant art appreciation’, to produce ’an exhibition of contemporary art aimed at infants’. However, this gave rise to various questions, such as ‘Are infants even capable of appreciating art?’ or ‘If they can, in what way?’ And in order to answer these, we tried to imagine our target audience.

Our target was to be children ranging in age from 0 to 6.[6] Basically, they would be unable to come to the museum on their own so they would be brought here by parents or grandparents. Alternatively, they may come on an outing from nursery school or kindergarten, in which case they would be accompanied by their teachers. Either way, it meant that a familiar adult would be at hand to serve as an intermediary between the museum and the children’s world. Another thing we had to bear in mind was that the children would be unable to read. They could not increase their understanding of the works through information contained in captions or explanations, their appreciation would stem solely from a visual or tactile understanding of the world that opens up in front of them.

This meant that the exhibition should not be one in which the viewers gained some knowledge or message from the works, rather, it needed to be based around works that could be experienced or sensed physically, works that served as a medium to promote communication with those accompanying them, this interactive experience creating a form of appreciation.

Having established our basic policy, we next sat down with the five participating artists to discuss what kind of experience they would like to offer children who were coming into contact with an art museum for the first time, and the exhibition gradually began to take shape. The characteristic shared by all five artists was that they created ‘art based on a motif that was close to the children and which would interest them.’ They wanted this first contact with art to be a wonderful experience for the children. With this concept in common, the five artists set about creating new works to fit the space available at MOT.

Tomoko HASHIMOTO: Picture-book World

HASHIMOTO creates paintings of motifs such as apples or camellias on huge canvases, or paints on panels which have been cut in the shape of the motif, using these to produce installations within the white space of the gallery. Her object is to produce ‘beautiful panels, beautiful paints and beautiful painted surfaces which combine to create a beautiful space’. In this exhibition, she presented 13 works, ranging from one of her early representative works, ‘Inspiration Has Descended’ (2003), to her latest, ‘white light, falling dark—camellia’ (2014). She uses familiar motifs, such as apples, morning glories or camellias, which appear to use simple forms and clear-cut colors but in fact, these shapes and coloring are anything but simple. The shapes are exact renditions of nature and the coloring is applied using a classic technique in which numerous layers of transparent oil paint are painstakingly built up, the result being familiar objects that appear in unfamiliar sizes, filling the gallery.

The painting of an apple in this exhibition, ‘Inspiration’ (2003), is approximately the same size as an adult and we saw lots of children standing

in front of it comparing its size with their own height. The installation, 'white light, falling dark—camellia' (2014), in which leaves appear to fall together with the light that flows down from the ceiling, is a true masterpiece, and many of the babies who visited the gallery stared up at the ceiling, their parents following their gaze to experience an awareness of the vastness of the space.

This gallery, in which people could experience the extraordinary world that is the museum, was given the title 'Picture-book World', in the hope that it would entice parents and children to talk to each other in the gallery, as they do when they are reading a picture book together. It aimed to promote communication between parents and children through the actions of 'seeing and talking'. Art allows us to understand that the things we feel and see are not always the same.

Ryota KUWAKUBO: A City of Light and Shade

As KUWAKUBO says, 'Initially, even the act of "seeing" must have been fascinating.'[7] In this exhibition he presented a work entitled 'Hello World!' (2014) that explores the visual world as experienced by babies. In it he uses objects to recreate movements that five babies reacted to, shining a light on them and contrasting the movements and the shadows they create to explore the reactions of babies and discover what the adults who witness them are able to learn from these.[8] The title of the work, 'Hello World' is derived from programming language; when people start to study programming, one of the first things they learn is a simple program that makes the legend, 'Hello World' appear on the computer screen. KUWAKUBO believes that the surprise and delight experienced by people when they succeed in this is similar to the surprise and delight felt by babies when they first see the world. Ideally, this work should be viewed in the company of a small child so that in addition to watching the movements of the work itself, the viewer can reassess it through the child's reactions. It is a work that invites adults to enter into the visual world of children.

'The Tenth Sentiment' (2010) is an installation consisting of a model train fitted with LED lights that passes along a row of everyday objects, the light shining on these to create huge images that explore the visual world of children. KUWAKUBO says of this work that it 'borrows the memories of the viewers'.[9] Exploring the act of 'seeing' through his works, KUWAKUBO believes that by borrowing a child's viewpoint, he is able to experience the action of 'seeing' afresh, in a conscious manner. Moreover, he proves that the idea of small infants being incapable of 'seeing' things is groundless, his works allowing both adults and children to experience the act of focusing their minds on the act of 'looking'.

Misa FUNAI: Paradise/Boundary

FUNAI creates pictorial spaces that focus on the boundary between reality and an imaginary world and in this exhibition she used a gallery with white walls and floor as a canvas upon which to create a pictorial space. Her works are experiences that float on the boundary between the second and third dimensions, image and object, natural and artificial, internal and external. In this exhibition she presented two works of mirror art that used caves or paradise as their motifs: 'Cave/Explosion' (2014) and 'Hole/Border/Paradise/Painting/Fundus of the Eye' (2010), and an interactive work consisting of a slide that had been painted with images of things from nature: 'Mountain/Motoko' (2014). She says that in these works 'the parts that have been depicted and those that have not are reversed to make a whole, invert the relationship that exists between the viewer, the viewed (the work) and the exhibition space. By so doing, the viewer is able to simultaneously experience the world of the image that underlies people's memories and sensations and the reality of the material world,' creating a feeling of traveling back and forth over the boundary.[10]

The theme of this work, paradise, is an image we all share but one that does not exist anywhere in reality and nobody has ever visited. FUNAI thinks of this scenery as being 'a landscape that human beings carry at the root of their beings, perhaps it is an image that lies at their extreme depths as living creatures.' 'Surely it is a landscape of hope that is necessary in order for people to overcome the despair and unease inherent in their lives.'[11]

In this exhibition, where children are free to play on the interactive works and peer into the mirror to see themselves within paradise, she has created an image of 'a paradise filled with children playing'. When they see this, surely adults will remember the time when they were young too. This is the point that at which FUNAI has arrived through her continued examination of pictorial space and reality.

Mayuko KANAZAWA: Forest of Animals

An image of the viewer is projected into an animated landscape that is home to animals; entitled 'The changing color of leaves' (2014), this video installation makes it possible for people to experience what it would be like to enter into this world.

The canvas that covers the walls of the gallery was hand-painted with an image of the Osawa pond in the grounds of Kyoto's Daikakuji Temple. Onto this canvas, she projected images representing the four seasons, such as 'the Old Man Who Made Withered Trees to Blossom', 'Animal God', 'Forest Creatures', 'Snowman', etc. When the viewer stands in front of the screen, they are filmed by a Kinect camera or iPhone and projected onto the screen, capturing the viewers' movements or bodily form and allowing it to respond interactively with the work. It is an 'interactive picture'.

KANAZAWA's work makes the viewer 'consider the act of art appreciation'. When we look at a painting, we combine the work with the various experiences that we possess, understanding it as an aggregate image. This 'interactive picture' serves to make these experiences that exist inside the head of the viewer visible. It invites the viewer into the world of the picture, allowing him or her to play with the blooming flowers or the creatures that live in the forest. This experience may be the same as that of imagining one's appearance when reading a picture book. The first step in appreciating a painting is to dive into it. This experience may provide a lesson to both parents and children who enjoyed this exhibition on how to appreciate art.

Akiko MUTO: Waterways

The theme of MUTO's work is the 'landscapes that pervade memory' and the stories behind her works begin with conversations she has with people she meets or research she carries out on a particular place. In this exhibition she has used the theme of the 'waterways' that characterize the Kiba/Fukagawa district, using fabric blocks to express an image of flowing water in an installation entitled 'w+a+t+e+r+w+a+y' (2014). Using a blue tone to create an image of the waterways with large objects representing waves or water, 1,500 fabric blocks have been connected using snap fasteners, allowing them to be recombined or removed at will, the shape of this interactive work remaining in a state of permanent flux.

The fabric blocks and wave-shaped paper objects were created using materials donated by people living in the neighborhood of the museum, through the cooperation of the people in Fukagawa Shiryokandori Shopping Street — the blue fabric representing water, rivers or canals coming from a variety of sources, including indigo cloth, festival happi coats, facecloths etc. — with workshops being held by the local people and primary school to produce the blocks.

According to the artist, the '+' signs in the title refer to the way in which the blocks are joined using snap fasteners to create the shape of the waterway,[12] and it is up to the viewers to connect these blocks in order to complete the work.

The aim of this work is to combine the memories of district, in which the development of waterways led to the prosperity of the area, with the memories of the people who live there. In actual fact, the production of the work brought the local people together, promoting conversation between the different generations while also linking them with the people who came to visit the museum.

This work may well have provided the ideal play space for the children who came to visit the museum. However, the texture and color of the fabric blocks they picked up is characteristic of this area and perhaps their experience of playing here will one day provide a trigger that will remind them of the museum and its surroundings.

3. In Closing—Towards a New Museum Image

When considering 'infants and art appreciation', one of the first questions that sprang to mind was 'are children capable of understanding art?' However, watching the children and parents who attended this exhibition provided the answer to this quandary.[13]

The theme of 'see & talk' that ran through this exhibition is one that occurs in the everyday interaction of parents and children. However, normal acts carried out within the special world of art that is the museum, probably create a slightly different experience. Art appreciation allows people to realize that even though they see the same thing as other people, they experience different sensations or ways of looking at it, demonstrating that children have their own worlds and the power to grasp them.

When we see the beauty and bounty of the visual world of children through the works created by the artists who participated in this 'Wonderful World' exhibition, it reminds we adults of the 'wonder we felt when we saw the world for the first time.' Possibly that emotion lies so far back in the past that we are no longer able to recall it. However, when we see the fresh amazement on the faces of the children in front of us, it may allow us to experience afresh the delight of seeing the world for the first time.

There must be a role for art and art museums to play in providing a scene where memorable communication can take place between parents and children. In the same way that many people have fond memories of visiting a zoo or amusement park with their parents when they were small, we would like to create the opportunity for similar memories through visits to exhibitions at the art museum. Then in ten or twenty years' time, when the children who had played at the 'Wonderful World' exhibition have grown up, we hope that they will come back to visit the museum again. Furthermore, when they have children of their own, we hope that they will think of museums as being one of the places where they can take them for the day. This is a new concept for museums and one that has only just begun.

Notes:

1. Sachiko NANBA 'Garden for Children' ("Garden for Children" exhibition catalogue), 2010, Museum of Contemporary Art Tokyo, p. 11

   'An art garden where people gather and become involved with others; if they do not limit themselves to the appreciation of the art, but also interact with each other, then the possibilities of the museum will be enlarged from the viewpoint of child raising.'

   Kazu ONO 'Yoshōji katsudō e no koryo' (Considering Infant Activities), (Edited by Hiroyasu OGASAWARA, Misako NAMIKI & Kunio YAJIMA "Hakubutsukan kyoikuron—Atarashii hakubutsukan kyoiku o egaki dasu" [Discourse on Museum Education—Creating a New Museum Education]), 2012, Gyosei p. 94

   'A museum offers "generational interaction, shared experience and enjoyable learning." With the current low birthrate and the increase in the number of the nuclear families within our country, it is necessary for more importance to be placed on the unique characteristics of museums to aid in child rearing, which differ from the passive amusement facilities offered by amusement parks or child-development facilities.'

2. In recent years, the National Art Center, Tokyo, the Tokyo National Museum, the Tokyo Metropolitan Art Museum and many other art museums throughout the country have started to provide childcare services.

3. Sachiko SUGIURA (Associate Professor, Musashino Art University Department Arts Policy and Management), 'Enjoy Art Museums Together with your Babies', lecture series presented as part of the associated program for 'Wonderful World' exhibition (August 23, 2014).

4. The 'From Age 0 Family Appreciation Program' at the Chigasaki City Museum of Art was organized by Megumi TOMITA, chairperson of the Art Care Hiroba, who was also responsible for the 'Baby Art' lecture at the Hiratsuka Museum of Art.

5. This exhibition presented the 'From Babies - Family Appreciation Program "Let's Explore the Wonderful World!"', (July 23, August 8, 2014) that was held as part of Sachiko SUGIURA's 'Analysis and growth of the Effect of Art Appreciation programs in Museums on Infant Psychological Development', in the Challenging Exploratory Research Program funded by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Research Budget, 2014.

6. In this essay, the definition of 'infants' complies with that given in the 'Maternal and Child Health Law'. Baby: less than one year of age. Infant: from age one to elementary school age.

7. "The Quest for Light and Darkness", Tochigi Prefectural Museum of Fine Arts, 2012, p. 20

8. Professor Masami K.YAMAGUCHI, Psychology Laboratory, Department of Literature, Chuo University, and professor So KANAZAWA, Department of Psychology Faculty of Integrated Arts and Social Sciences, Japan Women's University, offered advice on the creation of this work.

9. From KUWAKUBO's artist talk (August 3, 2014) as part of the associated program for 'Wonderful World'exhibition.

10. Misa FUNAI 'Misa Funai Work Explanation' ("Wonderful World" exhibition pamphlet), 2014

11. Op. cit.

12. From MUTO's artist talk (July 27, 2014) as part of the associated program for 'Wonderful World'exhibition.

13. 'Wonderful World' exhibition carried out an appreciation program aimed at children from age 0 to 2.

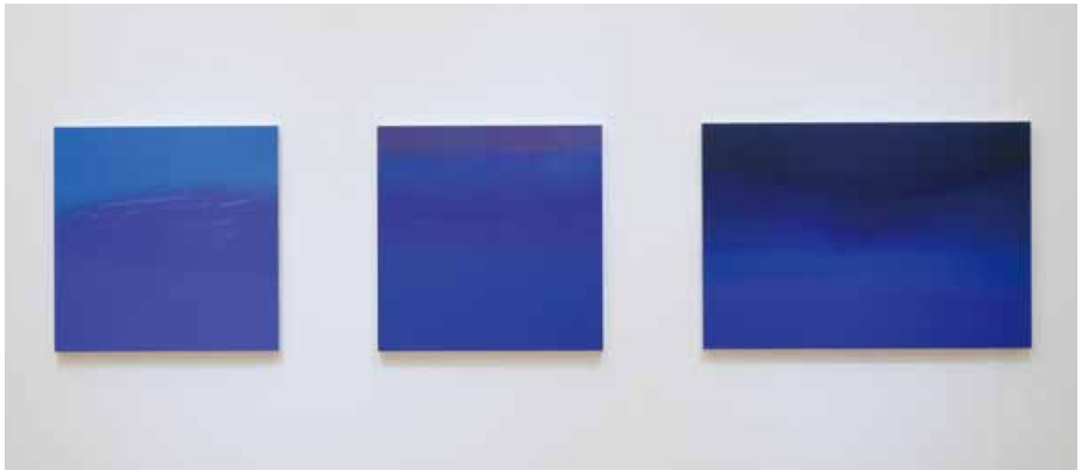
    'From Babies Family Appreciation Program "Let's Explore the Wonderful World!"', July 23, August 8, 2014. Lecturer: Sachiko SUGIURA

    'From Babies Family Appreciation Program, "Let's See and Talk Appreciation Tour of Wonderful World!"', August 20, 2014. Lecturer: Megumi TOMITA

《ひらめきは舞い降りる》 *Inspiration Has Descended*
《ヒラメキ》 *Inspiration*
《白い光、落ちる闇 - 椿》*white light, falling dark - camellia*
《クローズド・ミーティング》 *Closed Meeting*
《Loop and Change-Winter》*Loop and Change-Winter*
《Loop and Change-Winter》*Loop and Change-Winter*

橋本トモコ
Tomoko HASHIMOTO

クワクボリョウタ
Ryota KUWAKUBO



《どこへも帰らない - 江戸川》 *I don't go back anywhere-Edogawa River*
《どこへも帰らない - 江戸川》 *I don't go back anywhere-Edogawa River*
《どこへも帰らない - 江戸川》 *I don't go back anywhere-Edogawa River*

《rain ／ fine》 *rain ／ fine*
《エンコーディング オブ ライフ》 *Encoding of Life*
《透明な土 - 蜜柑》 *The Clear Earth - Mandarin*
《私はどこから来たのか／マルヤマ》 *Where Do I Come From? ／ Maruyama*

《10 番目の感傷（点・線・面）》 *The Tenth Sentiment*

《ハローワールド！》部分 *Hello World!*

《ハローワールド！》 *Hello World!*

《楽園／境界》 *Paradise / Boundary*

船井美佐
Misa FUNAI

《洞窟 / 爆発 》 *Cave / Explosion*

《Hole / Trans rabbit 》 ***Hole / Trans rabbit***
《Hole / Flower snake》 ***Hole / Flower snake***
《maru / sankaku / shikaku》 ***circle / triangle / square***

《Mountain / Motoko》 ***Mountain / Motoko***

《Canvas / Bed》 ***Canvas / Bed***

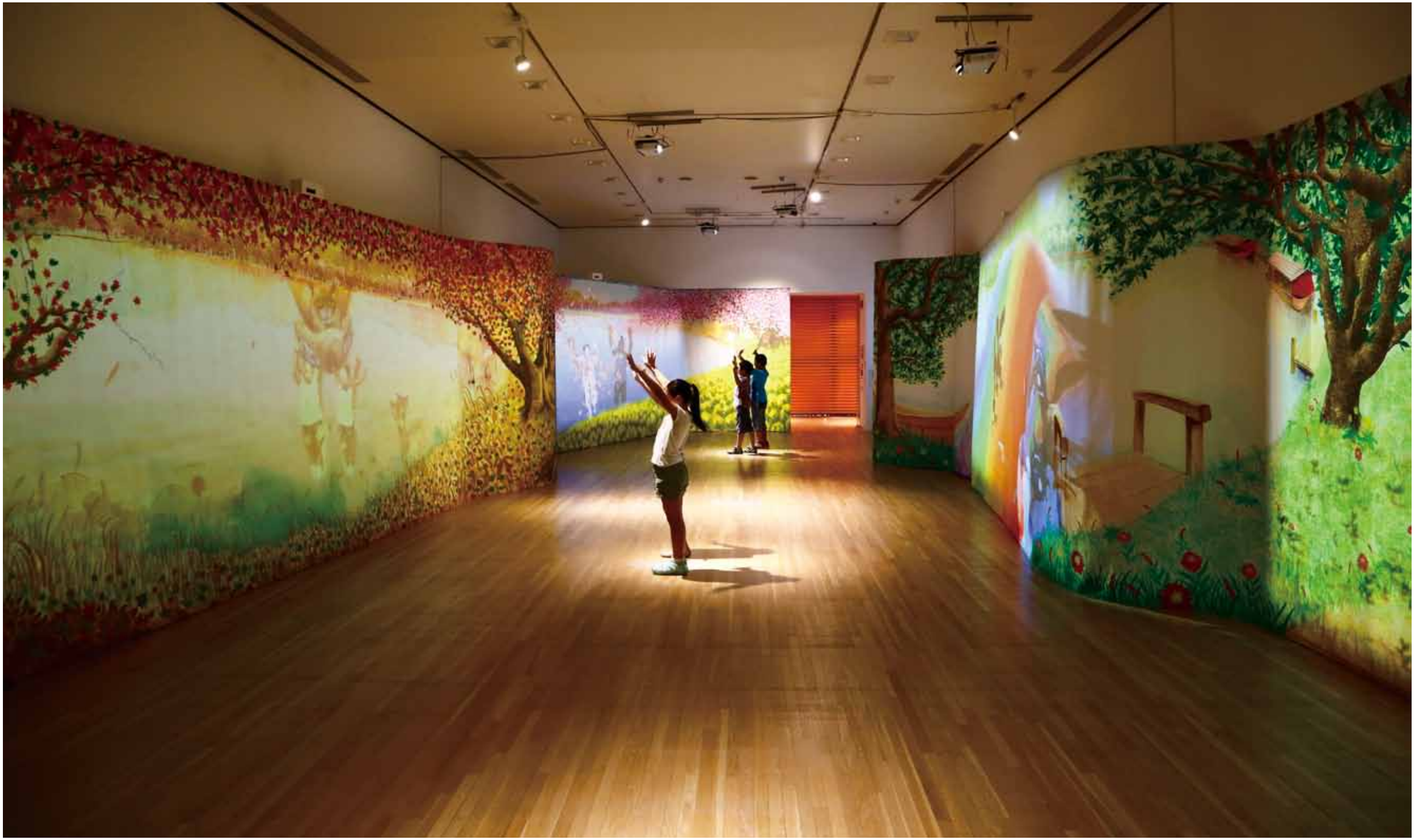
《maru / sankaku / shikaku》
circle / triangle / square

《Gozoroppu》
the Internal Organs

《Mountain / Motoko》部分
Mountain / Motoko

金澤麻由子
Mayuko KANAZAWA

《うつろい いろは》部分 *The changing color of leaves*



《うつろい いろは》 *The changing color of leaves*

《水の路 w+a+t+e+r+w+a+y》 *w+a+t+e+r+w+a+y*

武藤亜希子
Akiko MUTO

《水の路 w+a+t+e+r+w+a+y》部分　*w+a+t+e+r+w+a+y*

《水の路 w+a+t+e+r+w+a+y》部分　*w+a+t+e+r+w+a+y*

《なくしもの屋》 *Office of Lost Things*

橋本トモコ

1969　千葉県生まれ
1996　多摩美術大学大学院美術研究科修了
2002　第 17 回ホルベイン・スカラシップ奨学生
2003　第 6 回資生堂ＡＤＳＰ選出

個展
1995 - ギャラリー現／東京
1997 - オレゴンムーンギャラリー／東京
1999 - 富士銀行ストリートギャラリー（富士銀行数寄屋橋支店）／東京
- なびす画廊／東京
2001 - GINZA SQUARE MUSEUM（銀座文具）／東京
2003 - なびす画廊／東京
2004 -「ストロベリーフィールズ」ギャラリー山口／東京
2006 -「ツバキ赤く」藍画廊／東京
-「私はどこから来たのか」Bunkamura GALLERY+ ／東京、Bunkamura Arts & Crafts ／東京
2008 - 亀山画廊／静岡
2012 -「透明な土」STORE FRONT ／東京
2013 -「FLAT ⇄ BAROQUE―絵画があらわすもの －」ギャラリーサザ／茨城
2014 -「白い光、落ちる闇」千葉市民ギャラリー・いなげ／千葉

主なグループ展
1994 -「第 23 回現代日本美術展」 東京都美術館、京都市美術館
1995 -「第 2 回別府現代絵画展」 別府市美術館／大分
2003 - アミューズランド 2004「ガリバー美術探検記」北海道立近代美術館
2005 - ふなばし現代美術交流展 ‘05「物語が生まれる所」船橋市民ギャラリー／千葉
2006 -「第 25 回損保ジャパン美術財団 選抜奨励展」損保ジャパン東郷青児美術館／東京
2007 -「第 7 回前田寛治大賞展」 日本橋髙島屋／東京、倉吉博物館／鳥取
2008 -「京橋 3-3-8」藍画廊／東京
2009 -「VOCA 展 2009　現代美術の展望―新しい平面の作家たち」上野の森美術館／東京
-「絵画 花 -blossom　青木恵・橋本トモコ・久米亮子」ギャラリー山口／東京
-「KOMAZAWA MUSEUM × ART」駒沢公園ハウジングギャラリー／東京
2010 -「はないばら - 秘められた美へ - (主催 : 千葉市美術館 , 千葉大学)」千葉市民ギャラリー・いなげ , 旧神谷伝兵衛別荘／千葉
-「橋本トモコ ＋ 湯川雅紀」GALLERY TERASHITA ／東京

作家ホームページ
http://hashimoto-tomoko.com/

Tomoko HASHIMOTO

1969 - Born in Chiba
1996 - Completed Master's Degree Course, Graduate School of Tama Art University
2002 - The 17th Holbein Scholarship Grant
2003 - Selected to 6th Art Documents Support Program by SHISEIDO

Solo Exhibitions
1995 - Gallery GEN, Tokyo
1997 - Oregon Moon Gallery, Tokyo
1999 - The Fuji Bank Street Gallery, The Fuji Bank Sukiyabashi Branch, Tokyo
- nabis gallery, Tokyo
2001 - GINZA SQUARE MUSEUM, Ginza Bungu, Tokyo
2003 - nabis gallery, Tokyo
2004 - *Strawberry Fields*, Gallery Yamaguchi, Tokyo
2006 - *Camellias in Red*, ai gallery, Tokyo
- *Where do I come from?*, Bunkamura GALLERY+, Tokyo Bunkamura Arts&Crafts, Tokyo
2008 - Kameyama Gallery, Shizuoka
2012 - *The Clear Earth*, STORE FRONT, Tokyo
2013 - *FLAT BAROQUE*, Gallery Saza, Ibaraki
2014 - *white light, falling dark*, Chiba Citizens' Gallery Inage, Chiba

Selected Group Exhibitions
1994 - *THE 23rd CONTEMPORARY ART EXHIBITION OF JAPAN,1994* Tokyo Metropolitan Art Museum, Kyoto Municipal Museum of Art
1995 - *THE 2ND CONTEMPORARY ART EXHIBITION OF BEPPU,* Beppu City Art Museum, Oita
2003 - *A MUSE LAND 2004, Gulliver's Art Expedition,* Hokkaido Museum of Modern Art
2005 - *Funabashi Contemporary Art Exchange Exhibition'05, Place where story appears,* Funabashi Citizen's Gallery, Chiba
2006 - *The 25th Outstanding Rising Artists Exhibition, Presented by Sompo Japan Fine Art Foundation,* SEIJI TOGO MEMORIAL SOMPO JAPAN MUSEUM OF ART, Tokyo
2007 - *The 7th Kanji Maeda's Grand Prize Exhibition,* Takashimaya Nihonbashi Store, Tokyo, Kurayoshi Museum, Tottori
2008 - *Kyoubashi3-3-8*, ai gallery, Tokyo
2009 - *VOCA 2009, The Vision of Contemporary Art,* The Ueno Royal Museum, Tokyo
- *Paintings - blossom*, Gallery Yamaguchi, Tokyo
- *KOMAZAWA MUSEUM × ART,* Komazawa-park Housing Gallery, Tokyo
2010 - *hana-ibara*, Chiba Citizens' Gallery Inage, The former villa of KAMIYA Denbe, Chiba
- *HASHIMOTO Tomoko + YUKAWA Masaki*, GALLERY TERASHITA, Tokyo

クワクボリョウタ

1971　栃木県生まれ
1996　筑波大学大学院修士課程デザイン研究科総合造形修了
2001　国際情報科学アカデミー（IAMAS）アート＆ラボ科卒業

個展
2005 -「R ／ V」山口芸術情報センター [YCAM] ／山口
-「Studies for the Consumption」ルーシー・マッキントッシュ・ギャラリー／ローザンヌ、スイス＊
2006 -「cocosocoasoco」ルーシー・マッキントッシュ・ギャラリー／ローザンヌ、スイス＊
2009 -「クワクボリョウタ：微笑みトランジスタ」日本科学未来館／東京
2010 -「1. 落ちる水、2. 照明用ガス、を与えてみた」AD ＆ A ギャラリー／大阪
2011 -「The Tenth Sentiment」ルーシー・マッキントッシュ・ギャラリー／ローザンヌ、スイス
-「クワクボリョウタ　LOST # 4」 アートハウスあそうばらの谷／千葉
2012 -「ひかり・くうかん・じっけんしつ」ＮＴＴインターコミュニケーション・センター［ICC］／東京＊

＊ Perfektron（クワクボリョウタ＋山口レイコ）名義での発表

主なグループ展
2003 -「サイバーアジア：メディア・アートの近未来」広島市現代美術館
2004 -「六本木クロッシング　日本美美術の新しい展望 2004」森美術館／東京
2011 -「世界制作の方法」国立国際美術館／大阪
2013 -「反重力　浮遊｜時空旅行｜パラレル・ワールド」豊田市美術館／愛知
-「Mono no Aware. Beauty of Things. Japanese Contemporary Art」エルミタージュ美術館／サンクトペテルブルグ、ロシア
2014 -「あそびのつくりかた」丸亀市猪熊弦一郎現代美術館／香川
-「Variations of the Moon」Nam June Paik Art Center ／龍仁、韓国
-「Perth International Arts Festival」Curtin 大学／パース、オーストラリア

作家ホームページ
http://ryotakuwakubo.com/

Ryota KUWAKUBO

1971 - Born in Tochigi
1996 - Graduated from Plastic Arts and Mixed Media Master's Program in Art and Design of the University of Tsukuba
2001 - Graduated from International Academy of Media Arts and Siences

Solo Exhibitions
2005 - *RIV*, Yamaguchi Center for Arts and Media[YCAM]
- *Studies for the Consumption*, Galerie Lucy Mackintosh, Lausanne, Switzerland [in the name of Perfektron (Kuwakubo Ryota+Yamaguchi Reico)]
2006 - *cocosocoasoco*, Galerie Lucy Mackintosh, Lausanne, Switzerland [in the name of Perfektron (Kuwakubo Ryota+Yamaguchi Reico)]
2009 - *The Smiley Transistors*, National Museum of Emerging Science and Innovation [Miraikan], Tokyo
2010 - *Gave: 1. The Waterfall*, *2. The Illuminating Gas*, AD&A Gallery, Osaka
2011 - *The Tenth Sentiment,* Galerie Lucy Mackintosh, Lausanne, Switzerland
- *LOST#4*, Art House – ASOHBARA Valley, Chiba
2012 - *Light-Space Laboratory*, NTT Inter Communication Center[ICC], Tokyo [in the name of Perfektron (Kuwakubo Ryota+ Yamaguchi Reico)]

Selected Group Exhibitions
2003 - *Cyber Asia -media art in the near future*, Hiroshima City Museum of Contemporary Art
2004 - *Roppongi Crossing* : *New Visions in Contemporary Japanese Art 2004*, Mori Art Museum, Tokyo
2011 - *Way of Worldmaking*, The National Museum of Art, Osaka
2013 - *Antigravity*, Toyota Municipal Museum of Art, Aichi
- *Mono no Aware* : *Beauty of Things. Japanese Contemporary Art*, Hermitage Museum, Saint Petersburg, Russia
2014 - *Playmaking*, Marugame Genichiro-Inokuma Museum of Contemporary Art, The MIMOCA Foundation, Kagawa
- *Variations of the Moon*, Nam June Paik Art Center, Yongin-si, Korea
- *Perth International Arts Festival,* Curtin University, Perth, Australia

船井美佐

1974　京都府生まれ
1996　京都精華大学美術学部造形学科日本画科卒業
2001　筑波大学大学院修士課程芸術研究科修了

個展
1998 -「UNDER HEAVEN」ギャラリーすずき／京都
2001 -「TRANCE GROOVE」ギャラリー山口／東京
2003 -「TRANCE GROOVE」ギャラリー山口／東京
2004 -「TRANCE GROOVE －白珠－」VOICE GALLERY ／京都
2005 -「メタモルフォーゼと須弥山」京都精華大学 shin-bi ／京都
2006 -「massless the hormone ／質量のないドローイング」VOICE GALLERY ／京都
-「Nirvana － Live painting installation －」street gallery ／兵庫
-「Nirvana － Shine plexus －」gallery Ray ／愛知
2007 -「メタモルフォーゼと桃源郷」Bunkamura GALLERY ＋／東京
-「－境界－プラトニックディスコ」應典院／大阪
2009 -「drive ～領域の境界を旅する～」京都精華大学 shin-bi ／京都
2010 -「楽園／境界」ギャラリエ アンドウ／東京

主なグループ展
2000 -「第 11 回関口芸術基金賞展」柏市文化フォーラム 104 ／千葉［'02］
2003 -「トーキョーワンダーウォール公募 2003」東京都現代美術館
-「Stay With Art ~ 眠りの情景 ~ 水・土・火・風」T-point hotel art project ／大阪
2004 -「京都府美術工芸新鋭選抜展 2004 ～新しい波～」京都文化博物館［'06］
-「Take art collection 2004」スパイラルギャラリー／東京［'05］
2005 -「触覚と視覚の交差点（光島貴之×船井美佐）」ギャラリーはねうさぎ／京都
-「日本画ジャック」京都文化博物館／京都
2006 -「√ roots ～わたしの中の日本的なるもの～」法然院［京都芸術センター制作支援事業］／京都
-「ふなばし現代美術交流展 06 ～ひかりあるところで～」船橋市民ギャラリー／千葉
2007 -「Sleep － Are You Awake? －」アートフロントギャラリー／東京
-「裏糸　Under Thread 」国際芸術センター青森
2009 -「VOCA 展 2009 現代絵画の展望－新しい平面の作家たち」上野の森美術館／東京［'10］
2010 -「光島貴之×船井美佐～ IMAGE ～触覚と視覚の交差点」3331Arts Chiyoda ／東京
2011 -「発信 // 板橋 //2011」板橋区立美術館／東京
-「medium」オオシマファインアーツ／東京
2012 -「言葉と美術が繋ぐもの－中原佑介へのオマージュ展」ギャラリー ヤマキファインアート／兵庫
2013 -「KAMIKOANI プロジェクト秋田 2013」秋田県上小阿仁村
-「六甲ミーツ・アート 芸術散歩 2013」六甲山ホテル／兵庫

作家ホームページ
http://misafunai.com/

Misa FUNAI

1974 - Born in Kyoto
1996 - BFA in Japanese Painting, Kyoto Seika University
2001 - MFA in Art and Design, University of Tsukuba

Solo Exhibitions
1998 - *UNDER HEAVEN*, GALLERY SUZUKI, Kyoto
2001 - *TRANCE GROOVE*, Gallery Yamaguchi, Tokyo
2003 - *TRANCE GROOVE*, Gallery Yamaguchi, Tokyo
2004 - *TRANCE GROOVE-SHIRATAMA-*, VOICE GALLERY, Kyoto
2005 - *Metamorphose and SHUMISEN*, Kyoto Seika University Shin-bi, Kyoto
2006 - *massless the hormone*, VOICE GALLERY, Kyoto
- *Nirvana–Live painting installation–*, street gallery, Hyogo
- *Nirvana–Shine plexus–*, gallery Ray, Aichi
2007 - *Metamorphose and Paradise*, Bunkamura GALLERY＋, Tokyo
- *Boundary–Platonic Disco–*, Outenin Temple, Osaka
2009 - *Drive*, Kyoto Seika University Shin-bi, Kyoto
2010 - *Paradise/Boundary,* GALERIE ANDO, Tokyo

Selected Group Exhibitions
2000 - *The 11th Sekiguchi Art Foundation Prize Exhibition*, Kashiwa City Cultural Forum 104, Chiba ['02]
2003 - *Tokyo Wonder Wall 2003*, Museum of Contemporary Art Tokyo
- *Stay With Art–Scenery of sleep–*, T–point hotel art project, Osaka
2004 - *Selected Artists in Kyoto–2004 New Wave*, The Museum of Kyoto ['06]
- *Take art collection 2004*, Spiral, Tokyo ['05]
2005 - *The Crossing of tactile perception and visual perception*, Gallery Haneusagi, Kyoto
- *Japanese Painting Jack*, The Museum of Kyoto
2006 - *√roots–the Japanese one in me–*, Honenin Temple [Supported by Kyoto Art Center], Kyoto
- *Funabashi Contemporary Art Exchange Exhibition '06: The Place with Lights*, Funabashi Citizen's Gallery, Chiba
2007 - *SLEEP–Are You Awake? –*, Art Front Gallery, Tokyo
- *Under Thread*, Aomori Contemporary Art Center
2009 - *VOCA 2009 The Vision of Contemporary Art*, The Ueno Royal Museum,Tokyo ['10]
2010 - *IMAGE-*, 3331Arts Chiyoda, Tokyo
2011 - *Dispatch//Itabashi//2011*, Itabashi Art Museum, Tokyo
- *medium*, Ohsima Fine Art, Tokyo
2012 - *The Link Between Words and Art: An Homage to Nakahara Yusuke*, GALLERY YAMAKI FINE ART, Hyougo
2013 - *KAMIKOANI PROJECT AKITA 2013*, Kamikoani, Akita
- *Rokko Meets Art 2013*, ROKKOSAN HOTEL, Hyogo

金澤麻由子

1981　兵庫県生まれ
2008　京都嵯峨芸術大学大学院芸術学部芸術研究科修了

個展
2006 -「scopie- 犬の道 -」京都嵯峨芸術大学付属博物館／京都
-「ぼくぱぐ」galerie16 ／京都
2007 -「実存比喩―きっとそばに―」京都嵯峨芸術大学付属博物館／京都
2008 -「実存比喩 -O・F・ボルノウの『夜の空間』より -」galerie16 ／京都
2010 -「Sweet home メディアアートアトリエ展 Vo.1」
京都嵯峨芸術大学／京都
2011 -「Sweet home 映像アニメーションの光の絵画」galerie16 ／京都
2012 -「『てんからのおくりもの』絵本原画展」射水市大島絵本館／富山
2013 -「ひつじのうた」新生堂ギャラリー／東京
2014 -「動く絵・金澤麻由子」ヤマザキマザック美術館／名古屋
-「『てんからのおくりもの』絵本原画展」射水市大島絵本館／富山
-「ぼくぱぐ絵本原画展」ステップスギャラリー／東京

主なグループ展
2005 -「神戸アートアニュアル 2005 眺めるに触れる」
神戸アートビレッジセンター ／兵庫
2006 -「インターカレッジメディアアート展」京都精華大学ギャラリー
フロール／京都
2008 -「デジタルアートフェスティバル東京 2008」
パナソニックセンター東京／東京
-「ACG eyes：映像とドローイング -narrative-」ARTCOURT Gallery ／
大阪
2009 -「ART COCKTAIL 2009 IN 笠間」カフェ・グリュイエール／茨城
-「自然のこえ 命のかたち」国立民俗学博物館特別展示館／大阪
-「自然のこえ 命のかたち」キッズプラザ大阪
2011 -「まなざしの哲学 - 京都嵯峨芸術大学の 40 年 」京都市美術館別館／
京都
2012 -「Polyphonic Jump ！新春体感アート展」ホテルオークラ神戸／兵庫
-「On the Steps - 若手作家 16 人の小品展 - 」ステップスギャラリー／
東京
-「ハマビ ジョシュ テンジ」横浜美術大学ギャラリー／神奈川
-「第 1 回 Kawaii+ 大賞展 」スパイラルガーデン／東京
-「文化庁メディア芸術祭神戸展」デザイン･クリエイティブセンター
神戸 ／兵庫
-「北青山 ∞ KOBE Biennale」オリエギャラリー／東京
-「ニューアート展 NEXT －動く絵、描かれる時間－」
横浜市民ギャラリー／神奈川
2013 -「Kawaii+ 大賞展」志賀高原ロマン美術館／長野
2014 -「あさごの森で光と影のピクニック」あさご芸術の森美術館／兵庫

著書
『てんからのおくりもの』射水市大島絵本館 2012 年
『ぼくぱぐ』出版ワークス 2014 年

作家ホームページ
http://www.mayuart.com/

Mayuko KANAZAWA

1981 - Born in Hyogo
2008 - Completed from Kyoto Saga University of Arts Graduate School

Solo exhibitions
2006 - *scopie*, Kyoto Saga University of Arts Affiliated Museum, Kyoto
- *Boku Pagu*, galerie16, Kyoto
2007 - *Existence Metaphor*, Kyoto Saga University of Affiliated Museum, Kyoto
2008 - *Existence Metaphor -From "Spece of The Night" of Otto Friedrich Bollnow-*, galerie16, Kyoto
2010 - *Sweet home -Atelier of Media art room2 exhibition Vo.1*, Kyoto Saga University of Arts, Kyoto
2011 - *Sweet home Pictures of the light of image animation*, galerie16, Kyoto
2012 - *"The present from heavens" Original picture exhibition*, OSHIMA PICTURE BOOK OF MUSEUM, Toyama
2013 - *Poetry of the sheep*, Shinseido Gallery, Tokyo
2014 - *Mayuko Kanazawa's Moving Picture*, THE YAMAZAKI MAZAK MUSEUM OF ART, Nagoya
- *"The present from heavens" Original picture exhibition*, OSHIMA PICTURE BOOK OF MUSEUM, Toyama
- *"Boku Pug" Original picture exhibition*, Steps Gallery, Tokyo

Selected group exhibitions
2005 - *Kobe Art Annual Project 2005*, Kobe Art Village Center, Hyogo
2006 - *Intercollege Media Art Exhibition,* Kyoto Seika University Gallery Fleur, Kyoto
2008 - *DIGITAL ART FESTIVAL TOKYO 2008*, Panasonic Center, Tokyo
- *ACG eyes Image and Drawing -narrative-*, ARTCOURT Gallery, Osaka
2009 - *ART COCKTAIL 2009 in Kasama*, Café Gruyeres, Ibaraki
- *Voices from the Land,Vision of Life*, National Museum of Ethnology, Osaka
- *Voices from the Land,Vision of Life*, Kids plazaOsaka
2011 - *Philosophy of look - Kyoto Saga University of Arts of 40 years*, Kyoto Municipal Museum of Art
2012 - *Polyphonic Jump New Year Physical feeling Art exhibition*, Hotel Okura Kobe, Hyogo
- *On the Steps*, Steps Gallery, Tokyo
- *Hamabi Joshu Exhibition*, Gallery YCAD, Kanagawa
- *1th Kawaii+ Grand-prix exhibition*, Spiral Garden, Tokyo
- *Japan Media Arts Festival in Kobe*, Design creative centre Kobe, Hyogo
- *Kitaaoyama ∞ KOBE Biennale*, Orie Gallery, Tokyo
- *New Art NEXT, Foreword to Moving Picture and Depicted Time*, Yokohama Civic Art Gallery, Kanagawa
2013 - *1th Kawaii+ Grand-prix exhibition*, Shiga Kogen Roman Museum, Nagano
2014 - *Find the Light and Shadow in the Forest of ASAGO*, ASAGO ART VILLAGE, Hyogo

Publication
The present from heavens, OSHIMA PICTURE BOOK OF MUSEUM, 2012
Boku Pug, SHUPPAN WORKS co., Ltd, 2014

武藤亜希子

1975　千葉県生まれ
2002　東京芸術大学大学院美術研究科修士課程油画修了
2006　東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程油画満期修了

個展
2003 -「道に迷う配達屋」フタバ画廊／東京
-「器のない池」gallery J2 ／東京
2004 -「底が抜けた庭」MUSEE F ／東京
2009 -「その部屋の奥の行き止まりの入口」Art Center Ongoing ／東京

主なグループ展
2001 -「SAP ART DELIVERY 2001」（セゾン・アートプログラム企画）
芦花ホーム／東京
-「記憶のかさなり展」セゾン・アートプログラムギャラリー／東京
2004 -「collaboration 2004 日本マケドニア現代アート交流展 」
BankArt ／神奈川
2005 -「船橋現代美術交流展 ' 05 物語が生まれる所」
船橋市民ギャラリー／千葉
2007 -「ケレン－主張する色彩」東京芸術大学美術館陳列館／東京
2008 -「団・DANS － The House 展－現代アートの住み心地」
日本ホームズ住宅展示場／東京
2009 -「越後妻有アートトリエンナーレ 大地の芸術祭 2009」
越後妻有交流館 [キナーレ] ／新潟
2010 -「DANDANS at No Man's Land」旧在日フランス大使館／東京
2011 -「Dandans Exhibition No.7 The Lounge」銀座ブルガリタワー 8 階
プライベート・ラウンジ／東京
-「nowhere －ここではないどこかへ」Bunkamura Gallery ／東京
-「DandansNo.8 － Hierher Dorthin －ここから、あちらから－」
ドイツ文化センター／東京
2012 -「越後妻有アートトリエンナーレ 大地の芸術祭 2012」
十日町商店街／新潟
2013 -「あなたという私 －双方向のコミュニケーションで生まれるアート－」
gallery COEXIST-TOKYO ／東京
- 武藤亜希子 × レティシア・シュレッサー = ガムラン「いろ ×
COULEUR ～色彩の向こう側へ 」gallery COEXIST-TOKYO ／東京

主なワークショップ
2004 -「時間のパッチワーク」神奈川県立近代美術館
2009 -「無くしもの探し」（越後妻有アートトリエンナーレ
大地の芸術祭 2009）キナーレ／新潟
2011 -「無くしもの探し」(こどものためのワークショップ博覧会「第 7 回 ワークショップコレクション」) 慶應義塾大学日吉キャンパス／神奈川
-「その枝はこの木」横浜市立中川小学校、都筑民家園／神奈川 ['12]
2012 -「思い出パッチワークの木」(越後妻有アートトリエンナーレ 大地の芸術祭 2012) 十日町商店街／新潟

作家ホームページ
http://akikomuto.com/

Akiko MUTO

1975 - Born in Chiba
2002 - MFA in Oil Painting, Tokyo University of the Arts, Tokyo
2006 - Participated in Ph.D.program, Oil Painting, Tokyo University of the Arts, Tokyo

Solo Exhibitions
2003 - *Deliverer lost the way* , Futaba gallery, Tokyo
- *Pond lost the basin*, gallery J2, Tokyo
2004 - *Groundless Garden* , MSEE F gallery, Tokyo
2009 - *Entrance of the end at the back of the room* , Art Center Ongoing, Tokyo

Selected Group Exhibitions
2001 - *SAP ART DELIVERY 2001* , SAIZON ART PROGRAM, Roka Home, Tokyo
- *Layers as Memory*, SAIZON ART PROGRAM Gallery, Tokyo
2004 - *Japan-Macedonia Exchange Exhibition of Contemporary Art*, BankArt, Kanagawa
2005 - *Funabashi Contemporary Art Exchange Exhibition'05, Place where story appears*,Funabashi Citizen's Gallery, Chiba
2007 - *KEREN – colors be –* , The University Art Museum,Tokyo, Tokyo University of the Arts, The Chinretsukan Gallery
2008 - *The House -How to live with modern art-*, Nippon Homes model houses / Tokyo
2009 - *Echigo-Tsumari Art Triennial 2009* , Echigo-Tsumari Koryukan KINARE, Niigata
2010 - *DANDANS at No Man's Land*, the former French Embassy Annex building, Tokyo
2011 - *Dandans No.7 The Lounge*, The Bulgari Ginza Tower, 8th floor private lounge, Tokyo
- *nowhere*, Bunkamura Gallery, Tokyo
- *DANDANS Exhibition No,8 Hierher Dorthin*, Goethe-Institut, Tokyo
2012 - *Echigo-Tsumari Art Triennial 2012*, Tokamachi, Niigata
2013 - *I equal to you, Arts created by interactive communication*, gallery COEXIST-TOKYO, Tokyo
- *IRO×COULEUR~AU-DELA DE LA COULEUR* , gallery COEXIST-TOKYO, Tokyo

Selected Workshops
2004 - *Patchwork of time*, The Museum of Modern Art Kamakura & Hayama, Kanagawa
2009 - *A Search for lost articles*, Echigo-Tsumari Art Triennial 2009 , Echigo-Tsumari Koryukan, KINARE,Niigata
2011 - *A Search for lost articles, workshop collection No.7*, Keio University, Hiyoshi Campas, Kanagawa
- *This branch is from this tree* , Yokohama-shi Nakagawa elementary school, Tsuzuki Minkaen, Kanagawa ['12]
2012 - *The patchwork tree of memories, Echigo-Tsumari Art Triennial 2012*, Tokamachi, Niigata

凡例
・作家略歴は、各作家から提供のあった資料に基づき作成し、2014 年 7 月 12 日現在までのものを年代順に記載した。
・作家の活動は展覧会歴を中心に、和・英の順に記載した。
・展覧会歴は原則として以下の要領で記載した。
開催年、「展覧会名」、会場、都道府県（国外の場合は都市名および国名）ただし、会場名に都道府県名及び都市名が含まれる場合、都道府県名及び都市名を省略した。
・国外で開催された展覧会名、会場については、原則として原表記とした。
・開催年が異なる同名の展覧会の場合は［ ］内に開催年を記載した。

Note
・Each artist's biography was prepared on the basis of reference material provided by the artist.
・Biography is listed in chronological order. (As of 12 July 2014)

橋本トモコ　Tomoko HASHIMOTO

作品名	Title	制作年 Date	材質・技法	Materials/Technique	サイズ（縦×横 cm） Size (H × W cm)
ひらめきは舞い降りる	Inspiration Has Descended	2003	パネル、綿布、白亜地、油彩	Oil, chalk ground, cotton on panel	各 181.8 × 227.3
ヒラメキ	Inspiration	2003	パネルに綿布、白亜地、油彩	Oil, chalk ground, cotton on panel	141 × 128.8
私はどこから来たのか／マルヤマ	Where Do I Come From? / Maruyama	2005	パネル、綿布、白亜地、油彩	Oil, chalk ground, cotton on panel	各 112 × 145.5
クローズド・ミーティング	Closed Meeting	2008	パネル、綿布、白亜地、油彩	Oil, chalk ground, cotton on panel	162 × 162 162 × 227.3
Loop and Change-Winter	Loop and Change-Winter	2010	木、ミュー・グラウンド、油彩	Wood, μ-ground, oil	サイズ可変 size variable（22 点組）
Loop and Change-Winter	Loop and Change-Winter	2010	パネル、綿布、白亜地、油彩	Oil, chalk ground, cotton on panel	65.2 × 65.2
透明な土 - 蜜柑	The Clear Earth - Mandarin	2012	パネル、綿布、白亜地、油彩	Oil, chalk ground, cotton on panel	91 × 91
rain / fine	rain / fine	2009	パネル、綿布、白亜地、油彩	Oil, chalk ground, cotton on panel	91 × 91
エンコーディング　オブ　ライフ	Encoding of Life	2010	パネル、綿布、白亜地、油彩	Oil, chalk ground, cotton on panel	91 × 91
どこへも帰らない - 江戸川	I don't go back anywhere-Edogawa River	2014	パネル、キャンバス、油彩	Oil, canvas on panel	91 × 91
どこへも帰らない - 江戸川	I don't go back anywhere-Edogawa River	2014	パネル、キャンバス、油彩	Oil, canvas on panel	91 × 91
どこへも帰らない - 江戸川	I don't go back anywhere-Edogawa River	2014	パネル、キャンバス、油彩	Oil, canvas on panel	91 × 132
白い光、落ちる闇 - 椿	white light, falling dark - camellia	2014	パネル、アブソルバン、油彩	Oil, absorbant ground on panel	サイズ可変 size variable（150 点組）

クワクボリョウタ　Ryota KUWAKUBO

作品名	Title	制作年 Date	材質・技法	Materials/Technique	サイズ（縦×横 cm） Size (H × W cm)
10 番目の感傷（点・線・面）	The Tenth Sentiment	2010	LED ライト、鉄道模型、文具、雑貨	LED light, model railway, stationery, miscellaneous daily goods	サイズ可変 / size variable
ハローワールド！	Hello World!	2014	LED ライト、木、水、他	LED light, wood, water etc.	サイズ可変 / size variable

船井美佐　Misa FUNAI

作品名	Title	制作年 Date	材質・技法	Materials/Technique	サイズ（縦×横 cm） Size (H × W cm)
楽園 / 境界	Paradise / Boundary	2014	ミクストメディア	Mixed media	サイズ可変 / size variable
Hole / 桃源郷 / 境界 / 絵画 / 眼底	Hole / Paradise / Boundary / Painting / Fundus of the Eye	2010	アクリルミラー、木	Acrylic mirror, wood	円形部分直径 197.4 × 1.5
洞窟 / 爆発	Cave / Explosion	2014	ステンレスミラー	Stainless steel mirror	サイズ可変 / size variable
Mountain / Motoko	Mountain / Motoko	2014	顔料、木、ステンレス、ライトボックス	Pigment, wood, stainless, light box	480 × 375.4 × 995
Canvas / Bed	Canvas / Bed	2014	顔料、木、ステンレスミラー	Pigment, wood, Stainless steel mirror	194 × 61 × 158.6
Hole / Trans rabbit	Hole / Trans rabbit	2014	顔料、木	Pigment, wood	44.5 × 20.5 × 69.5
Hole / Flower snake	Hole / Flower snake	2014	顔料、木	Pigment, wood	39.7 × 20.5 × 62.4
Kaiba	Hippocampus	2014	顔料、木	Pigment, wood	55.7 × 20.5 × 83.9
Gozoroppu	the Internal Organs	2014	顔料、木	Pigment, wood	サイズ可変 / size variable
maru / sankaku / shikaku	circle / triangle / square	2014	顔料、木	Pigment, wood	240 × 240 × 240

金澤麻由子　Mayuko KANAZAWA

作品名	Title	制作年 Date	材質・技法	Materials/Technique	サイズ（縦×横 cm） Size (H × W cm)
うつろい いろは	The changing color of leaves	2014	絵画 2.7 × 50m、映像アニメーション、サウンド、PC、iPhone、キネクトカメラ、工業用カメラ、プロジェクター	Painting, animation, sound, PC, iPhone, kinect, distance sensor camera, projector	サイズ可変 / size variable

武藤亜希子　Akiko MUTO

作品名	Title	制作年 Date	材質・技法	Materials/Technique	サイズ（縦×横 cm） Size (H × W cm)
水の路 w+a+t+e+r+w+a+y	w+a+t+e+r+w+a+y	2014	深川の皆さんの布、合成皮革、その他	Cloth form Fukagawa area, artificial leather, etc.	サイズ可変 / size variable
なくしもの屋	Office of Lost Things	2013	みなさんのなくしもの、フェルト、その他	Felt, etc.	サイズ可変 / size variable

凡例
・本出品リストは、会場の展示順に以下の要領で記載した。
・各作家の作品データは次の順に記載した。
　作品名／制作年／素材・技法／サイズ（縦×横×奥行、または高さ×幅×奥行cm）
・素材・技法に関しては、作家より提供のあった資料に基づき表記した。
・出品作品は全て作家蔵。

Notes
・Each artists work is listed by category in accordance with the exhibited order in the gallery.
・All the data on each work are listed in order of title / year of production / material & technique / dimension (height × width × depth, in cm)
・The information of the material is based on that provided by the artist.
・All works are collection of the artist.

ワンダフル ワールド
こどものワクワク、いっしょにたのしもう
みる・はなす、そして発見！の美術展

2014 年 7 月 12 日（土）～ 8 月 31 日（日）
東京都現代美術館

主催：　公益財団法人東京都歴史文化財団
　　東京都現代美術館
協賛：　SHISEIDO
協力：　agnès b.、クレサンジャパン株式会社、
　　株式会社クサカベ、株式会社サクラクレパス、
　　ターナー色彩株式会社、ホルベイン工業株式会社、
　　株式会社リコー、千葉県立松戸高校、
　　深川資料館通り商店街協同組合、
　　深川ふれあいセンター、グランチェスター・ハウス、
　　ウエストユニティス株式会社、koikoi furniture factory、
　　武蔵野美術大学芸術文化学科、中央大学研究開発機構、
　　京都嵯峨芸術大学メディアアート分野、
　　江東区立元加賀小学校

企画：山本雅美（東京都現代美術館）
広報：野口玲子（東京都現代美術館）
ボランティア・マネジメント：市村朋子
展覧会インターン：秋山文、佐下橋容代、吉田佳寿美

会場グラフィックデザイン：北村直子

Wonderful World
Sparkle is everywhere! Let's see, talk, discover, and share the fun with everyone!

July 12, (Sat) - August 31, (Sun) 2014
Museum of Contemporary Art Tokyo

Organized by : Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture, Museum of Contemporary Art Tokyo
Sponsored by : SHISEIDO
In cooperation with : agnès b. , Claessens Japan Ltd. ,
KUSAKABE CORPORATION, SAKURA COLOR PRODUCTS CORPORATION,
TURNER COLOUR WORKS LTD., HOLBEIN Works, Ltd.,
RICOH COMPANY, LTD, Matsudo High School,
Fukagawa shiryokan Avenue Shopping Street Cooperative Society,
Fukagawa Fureai Center, Granchester House, WESTUNITIS,
koikoi furniture factory,
Musashino Art University, Department of Arts Policy and Management,
The Research and Development Initiative, Chuo University,
KYOTO SAGA UNIVERSITY OF ARTS Department of Fine Arts Media art domain,
Motokaga Elementary School

Curated by: Masami Yamamoto (Museum of Contemporary Art Tokyo)
Public Relations: Reiko Noguchi (Museum of Contemporary Art Tokyo)
Volunteer Manager: Tomoko Ichimura
Interns: Fumi Akiyama, Masayo Sagehashi, Kasumi Yoshida

Graphic Design: Naoko Kitamura

展覧会カタログ

編集：山本雅美（東京都現代美術館）
展覧会インターン：秋山文、佐下橋容代、
　　吉田佳寿美

翻訳：ギャビン・フルー
デザイン：北村直子
会場撮影：木奥恵三

制作：株式会社山田写真製版所
発行：東京都現代美術館　東京都江東区三好 4-1-1
© 2014

Exhibition Catalogue

Edited by Masami Yamamoto
(Museum of Contemporary Art Tokyo)
Interns: Fumi Akiyama, Masayo Sagehashi, Kasumi Yoshida

English translation by Gavin Frew
Designed by Naoko Kitamura
Photo: Keizo Kioku

Produced by YAMADA PHOTO PROCESS CO., LTD
Published by Museum of Contemporary Art Tokyo
4-1-1, Miyoshi, Koto-ku, Tokyo

© Museum of Contemporary Art Tokyo All right reserved 2014